

JAPAN URBAN DESIGN
INSTITUTE

都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷2-35-10

本郷瀬川ビルテ113

TELEPHONE 03-3812-6664

FACSIMILE 03-3812-6828

JUDI NEWS

045 NOVEMBER 20.
1998

発行者

都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●特集テーマ：「小京都」

- | | | |
|-----------------------|-------|----|
| 1. 小京都論 | | 1 |
| 2. 西の京、山口 | | 4 |
| 3. 北陸・中部の小京都 | | 6 |
| 4. 出石町 | | 8 |
| 5. 歴史都市の連携を目指して | | 11 |
| 6. 「小京都」と呼ばれるまちへのアケート | | 14 |
| ●第8期全国ブロック幹事会報告 | | 17 |

●ブロック例会レポート

- | | | |
|---------|-------|----|
| ■中部ブロック | | 18 |
| ■関東ブロック | | 20 |
| ■関西ブロック | | 21 |
| ■四国ブロック | | 23 |
| ●事務局より | | 24 |

特集：小京都

都市環境デザインにとって「小京都」はどのような意味をもつだろうか

特集

1

小京都論

田端 修

OSAMU TABATA

大阪芸術大学

芸術学部建築学科

モデル都市の模写・引用

原典の模写・模倣・引用といった行為は、わが国では古くから多くの分野で広く進められてきた。初心者や修業なれば人のびとにとっての手習いとは伝承のお手本をなぞることであり、一人前の歌詠みにあっては巧みに古歌を引用する能力が創作作業を支えたといってよいほどであった。異なるものや異なる知恵を取り入れ、身のまわりを豊かにしていく方法が、長い歴史のなかで洗練されてきたといって過言ではないのである。

「小京都」もまた、模写・引用の伝統に沿った事象である。たとえば、周防山口や土佐中村は京都を摸してまちづくりを進めた中世都市の代表選手である。早くから山口に城下町を経営していた大内氏であったが、1364年の上洛のおりに見た京都の町に魅せられた大内弘世が帰国後に町を流れる一の坂川を鴨川に擬し、また京風の町名を採用し、八坂社・清水・愛宕寺を建立するなど、京に倣った都市づくり始めたとされる。土佐中村では、応仁の乱(1467~)の戦火を避け、家領や妻の縁故を頼ってこの地にやって来た前関白一条教房の下向を契機にまちづくりが進んだと伝えられる。三方を囲む山と市中で合流する二つの川という地形、碁盤目状の町並みなど、まさに小京都と呼ぶにふさわしい都市構造がこうして形成された。

土佐中村のように、京都から離散・流浪した貴族や僧侶たちがその避難先で歌道・書道を広めたり、都の生活ぶりを伝えるなかで、土地の有力者が学問・文化の意味やそのなかでの都市の役割を意識し、小京都づくりに着手する例はその後もみられた。また

山口のように、花の都・京都を見る機会をもった為政者によって京風が導入されることもしばしばであった。

このような歴史を遡ることのできる都市のほか、いつの頃からか小京都と呼ばれるようになった都市は日本各地に点在する。歴史学者の村井康彦はかつて二、三の雑誌や書物からすると全国で23の小京都があると述べつつも、なかには歴史的にみて首をかしげさせるものもあると指摘している(『小京都へ』平凡社、1975)。このところ、各地で進められている観光振興策のなかで、「××の小京都」はますます増大してきているように見受けられる。「小さいが、京都に似た感じのする都市」(角川国語大辞典)は、そのような小京都の成立過程を言い当てているといえよう。

いっぽうでは小京都などと自ら名乗るのは癪にさわる、という気分もありそうだ。地域ごとのアイデンティティの重視や自分たちの町への誇りからすれば当然のことである。この特集記事を編むために実施した小京都に関するアンケート調査では「全国京都大会議」(「小京都大会議」ではないことに留意)の会員の方々にご回答いただいたが、これには「全国の小京都や京都ゆかりの54市町」一商工会議所や観光協会が多いが加入している。

そこで「小京都と呼ばれることについて」の考え方を聞いた回答結果からは、自分のまちが小京都として括られることに否定的であったり、そのことにさほどの関心を抱いていないという反応もあることをつけ加えておこう。

ところで小京都は京都の何を引用しようとしているのだろうか。各地の小京都はそ

それぞれに独自の風土・地形などをもっており、京都の再現の方法は多様であるに違いない。アンケートによれば、小京都らしさに寄与している要素(Q1)について、80%程度の都市が「町並み」、50～60%が「社寺」や「建造物」をあげ、40%程度の都市が「盆地」「河川」などの地形条件に関わる要素をあげている。つづく「和菓子」「織物」「料理」「焼物」「染色」「人形」や「祭り」「庭園」「文化人」「芸術」「学問」などは分散的であるが、それぞれに都市ごとのポイントとなっているようである。また、「碁盤目状の町」は20%であった。

明らかに指摘できるのは、京都のイメージは歴史性と文化性であり、大部分の小京都はこれを共有しているということである。上述のように古くは盆地や河川などの地形的要件が重視されたが、それ以外の要素については、小京都それぞれの地域環境的な個性に従って具体的な模倣・引用の要素が選ばれていると考えられる、そのなかには物的な要素に止まらない多様な文化的・生活的な要素が含まれており、それらの集まりが独自の都市構造を醸し出す役割を担っているということであろう。

小京都のかたちは、地域ごとの環境特性にそって京都の一部要素をつづり合わせながら形成されており、それゆえに多様である。そう考えると、小京都にとっての京都は単なるモデル都市であり、自分たちの町を創るためにダシとして京都があると見るべきであろうと思う。このような状況をオギュスタン・ベルクは、「引用されたテキストの価値を持ち上げることが、同時に、それに言及するテキストの価値づけにもなる。二つの光源一典拠と著者自身の見方一が共存し、互いに価値を高め合うのである」(『都市の日本』筑摩書房、1996)と鮮やかに意味づけているが、現実はそれ以上に独自の京都性を輝かせる段階に入っていると考えたい。

いま少しいえば、引用であることを明言することに価値が生まれるのであって、こっそりと、しかし多くの人が見破れるような模倣をすることは盗用になる。時間がたつとそれはますます隠しきれなくなる。引用と盗用の違いをしっかり認識しておく必要がある。

小京都・リトルトーキョー・××銀座、そして意匠系特許

京都もまた、唐・長安の都制を模倣・引用した都市である。しかし、そのおかけた地勢・環境のフレームはまったく別物である。必要とされた都市規模にも大きな懸隔があ

る。長短辺で数えると、長安では東西9.7km、南北8.2km、これに対し平安京は東西4.7km、南北5.7kmとされており、面積ではざっと3分の1、よく知られるように長安にめぐらされた高さ5mの城壁は(羅城門のまわり若干を除くと)平安京にはなかった。

古代の首都建設からして、モデルは遠慮なく改変され、身の丈に合うように描き換えられていたのである。このような改変・変換のありようは、モデル都市・京都と数多くの小京都の関係についても共通するところであり、その自在性こそはわれわれの引用方法の中に通時的に継続する特色である。

「リトルトーキョー」「××銀座」もまた同様の議論の対象である。いくつかの外国都市にある日本人街はしばしば「リトルトーキョー」と呼ばれる。トーキョーは今この時代の日本を代表する都市として選ばれるのであるから「小京都」に準じる命名法であるが、ここでは具体的な何かが東京に類似しているわけではない。引用されるのはトーキョーという名前だけである。多くの日本人が集まって住んでいるということだけで「東京」になる。リトルトーキョーは都市の一部を称するのに対し、小京都は都市域全体に関わる呼称であるという点をも合わせ、引用の手法に大きな違いがある。中心商店街の代名詞として使われている「××銀座」の場合はどうか。頭に都市名を冠した「××銀座」は、ふつうには空間的に似ても似つかない表情からでき上がっている。

単に名前だけを借りるという方法が、現代の<モデルー引用>のひとつのありようになっている。これが受け入れられる背景として、古くから「××の小京都」が通用してきたという引用の歴史があるかもしれない。そういういた<モデルー引用>による関係づけが好まれるという点は今も昔も変わらないのである。

しかしながらこの現代になって、身に染みついた引用の巧みさ、自在で器用な対応能力だけではこの世界をわたっていくことが難しい状況になってきた。例えば、建築の分野では主にデベロッパー・ゼネコン・大規模設計事務所などによって意匠系の特許・実用新案などがあちこちで出願されている。建築設計もまた、歴史的な知恵の積み重ねであり、その改良によって水準を高めていくというこの小論がよってたつ視点にたてば、おかしな事態と時代になっていると言わざるを得ない。そのような立場が制度的に認められる状況のなかで、<モデルー引用>図式の枠組みの中に立入注意という境界ゾーンが形成され始めているということである。ここでは、これ以上の不案内な法

律論への言及は避け、引用の方法についての洗練が求められる状況の到来を指摘するにとどめたい。

小京都論からするふたつの視点

そこで、以上にみてきた小京都論に的を絞り、都市環境デザインの作業に資するためのふたつの視点としてとりまとめることにしよう。

ひとつは、歴史文化都市としての共通性を生かし、現行の「全国京都会議」などのネットワークを活用し、伝統的都市環境の保全と創造の輪を拡大するとともに、そのためのデザイン理論や実践活動を拡充することである。

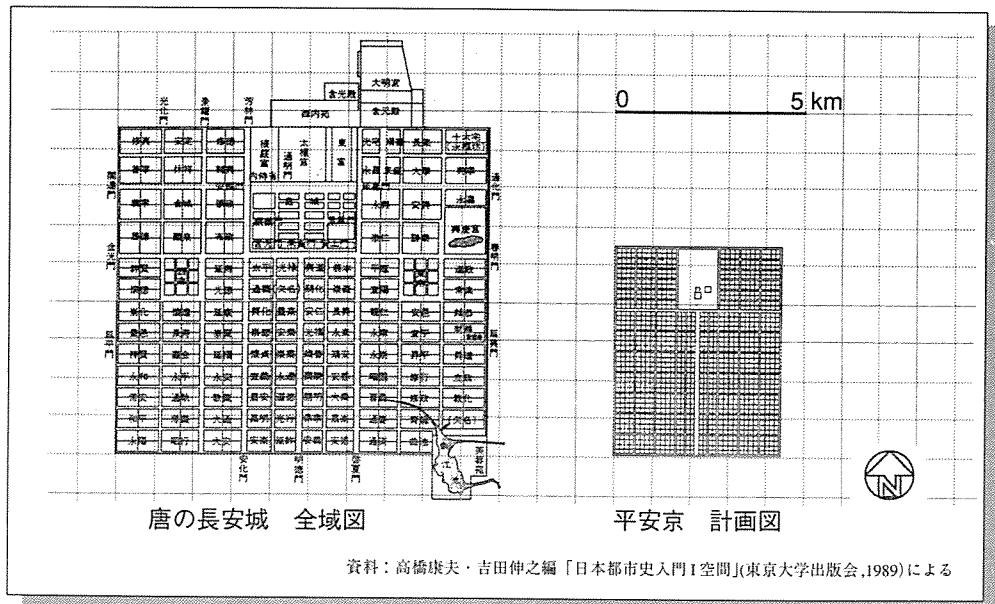
このような動きはすでに各地に見出すことができる。「全国京都会議」に比べてよりオフィシャルな組織である「全国伝統的建造物群保存地区協議会」(昭和54年発足)は、伝建地区をもつ市町村が「協調して日本の文化遺産としての集落町並の保存と活用および住民の生活と地域文化の向上に資する」ことを目的とするもので、平成10年5月現在で46市町村が加入している。「歴史的景観都市協議会」(昭和48年発足)は、「風趣ある歴史的・伝統的な市街地景観の保全を図っている都市(歴史的景観都市)相互の交流を深め、共通の課題について調査し、研究し、協議し、もって各歴史的景観都市の施策の推進に資することを目的とする」もので、1998年10月現在43市町村が加入している。このような目的に力添えすることはJUDIのひとつの役割であろうかと思う。

もうひとつは、そのような論点の枠組みを広げ、わが国現代の都市環境デザインを和風化・日本化する方法一つより一層風土になじむ環境デザイン、歴史的・文化的

な都市づくりの方法ーを研究し、推進するきっかけとすることである。残念なことに、わが国の近代化に際して採られた都市・建築デザインの制度は西欧からの輸入品であり、歴史的に蓄積されてきた都市デザインの手法やまちづくりの作法はまったくといってよい程に忘れ去られてきた。都市への人口や産業の集中により多種の建築物が一気に建設され始めた近代化期にあっては、洋風建築をベースにおいた制度でもって十分に用が足りたという事情もあった。

こうして、伝統的な建築作法は前近代の遺物としてほとんど無視され、「日本的な都市空間のかたち」を継承していくしくみへの関心はまったく乏しいままに、近代から現代への道をつづ走ってきたのである。わずかに風致地区等歴史的な風土の保全に目を向けた制度があったが、一部地域を除くと実効性を發揮することなく経過してきた。わが国におけるこれからの都市景観形成やまちづくりを展望する時、風土性や歴史性への配慮をまちづくりの枠組みのなかに取り込むことはぜひ必要な作業といえる。その際、各地の小京都において展開されているまちづくりや都市デザインの手法の整理、そして一般化の方法の検討や問題点の洗い直しなどは有用性の高い作業である。このようなかたちで、歴史的・文化的都市の集まりとしての「小京都ネットワーク」が全国すべての都市に影響力を發揮することが期待される。小京都ネットワークを都市環境デザインのためのモデルとして引用し、応用するわけである。

最後につけ加えると、一部の小京都などについていわれる、作り過ぎである映画のセットのようだ、テーマパークと変わらないではないか、といった批判への回答も、このような広い視野のなかで解きほぐされることになると考える。



西の京、山口

堀 賀貴

YOSHIKI Hori

山口大学 工学部
感性デザイン工学科

「小京都」山口の成り立ち

山口の場合、「小京都」というよりは「西の京」という呼び名の方がふさわしいのかもしれない。山口が西国一の都市となり、「西の京」あるいは「小京都」とよばれるようになつたのは、防府、長門を統一し、岩見を合わせた3カ国の大内弘世の時代である。彼が、吉敷郡大内村より、山口に移居したのは、正平15年(1360)頃と推定され、この時期に山口の都市基盤が形成された。弘世は、新都山口を京都に倣つた都市計画を行つたといわれている。実際に、大内氏時代の山口を江戸時代に復原した「山口古図」には、京に似て四神相応の地であるので京に倣つて町割りをした旨が記されている。しかし、弘世の最初の上洛が貞治3年(1364)であることを考え合わせると、「山口古図」の記述を完全に信じることはできない。山口の都市計画には京都の朱雀大路のような幹線道路や、坊条も無く、京都風の町割りは確認できない。むしろ、四方を山に囲まれ、盆地中央に一の坂川および南に椹野川を抱く地形が「小京都」を感じさせる四神相応の地として、こうした呼び名を生みだす要因となつたのであろう。

その後、大内数代を経て、徐々に山口の都市景観は形成されてゆく。弘世は、山口盆地の中央に百間四方の敷地に、堀割、土居を巡らせた館を構築した。「山口古図」では、「大殿御殿」と記されているこの館の周りに城下町が形成された。教弘の代には、築山館と称する大殿御殿に北接する新たな居館が増築され、その西側に堅小路とよばれる幹線道路が整備される。その南方には、堅小路と交差する東西に延びる石州街道がある。この石州街道と堅小路を中心に横町、堅町と呼ばれる縦横に分岐した町方の居住区が形成される。ただ、これらの道路は、台形の町割りを示し、必ずしも碁盤の目状にはなつてはいない。また、現時点では、一の坂を越えて街区が形成されていたとは確認されていない。したがつて、この点では厳密には京都の都市計画を模倣したとはいえない。ただ、長禄3年の大内氏壁書では「夜中に大路往来のこと、辻まうの事」が禁止されたことがうかがわれ、かなりのにぎわいを示していたことは推察される。

義興、義隆の時代にいたつて、「西の都」と呼ばれるほどの全盛期を迎える。特に、応仁の乱以後には、京都より多くの公卿、学者、僧侶、芸能者が下向したこともあり、大内文化と呼ばれる京都風の文化を形成した。天文20年(1551)に布教のため山口に訪れた耶蘇会士ザビエルは「日本国内にて頗る繁盛なる山口の城下に赴きたり、この地戸数一万

以上にして皆材木の構家なり」(「聖フランセスコ・ザベリヨ書翰記84号」と記し、当地が堺、博多と並ぶ都会であったことを物語ついている。

しかし、天文20年の陶晴賢の謀反、弘治2年の内藤隆世、杉重輔の内乱により築山館は消失した。また弘治3年、耶蘇会士トルレスは「市に火を放ちしが、人口1万を超えた市は一時間以内に消失し、火勢甚だしく……会堂及び我等の住院も亦焼けたり」(「耶蘇会士日本通信」の弘治3年11月7日付け)と書き送っている。この後、毛利氏によりかなりの復興を遂げていたことは確かであろうが、慶長5年、関ヶ原の敗戦により、毛利輝元が防長2州に減封された上、萩に退いたため、城下町山口は長い衰退の時期に入る。

「西の京」あるいは「小京都」と呼ばれはじめた大内時代を伝える建築物としては、室町時代建立の瑠璃光寺五重塔(当時は香積寺)、竜福寺本堂があげられる。しかし、後者は室町期の建立ではあるが、明治14年に旧本堂が焼失したため、同16年、椹野川を隔てた南側の大内御堀地区にある氷上山興隆寺釈迦堂を移築したものであり、当時の山口の町並みを伝える建築物とはいえない。あるいは、元治元年築山館の跡地に移された八坂神社本殿は、室町末期の建築でもと高峯の東麓にあった。

残念ながら、現在、「西の京」を志向して山口を建設した大内氏と我々が共有できる景観は、北部にそびえる瑠璃光寺五重塔、八坂神社本殿と、四方を山に囲まれた一の坂川河畔に広がる山口盆地の地形のみであろう。

「近代」山口の形成

文久3年(1863)、毛利敬親は激動する中央政局に対処するために、萩指月城を出て山口御茶屋に移り、第1次長州戦争敗戦などによりいったんは萩へ帰城したものの、慶応元年(1865)より本格的に藩庁建設を開始し、明治4年(1871)の廃藩置県を経て、藩庁は県庁となり山口は再び政治の中心となつた。以後、山口には県庁を中心に県関係の各種機関、施設、中央政府の出先機関、あるいは主要な教育機関が置かれ、政治、教育都市としての特徴を示す。

明治末から戦前にかけて、県都、学都とも呼ばれた山口市は県内各地への道路交通網の整備を目指すこととなる。県庁の所在地でありながら、鉄道の本線からはずれていったため、山口～小郡、山口～防府などの県南部とを結ぶ道路の改修が進められた。特に昭和19年には、「大山口市」(山口県中枢都

市)建設を目指して周囲2町、7ヶ村を合併したが、敗戦とともに同構想に批判が起り、昭和22年には阿知須町、同24年には小郡町が分離している。しかし、同27年には再び「大山口市」建設計画が見直され、同31年、鑄銭司村、同31年、大内町を編入している。このようななめまぐるしい市域の変化、拡張は結果として「小京都」たる旧市街地への関心を薄める結果ともなったようである。同40年以降の住居表示の実施により、大内時代からの町名の多くが姿を消した。

さらに、県内各地との道路交通網の整備は、狭い盆地の中を鉄道や数本の幹線道路が走る結果を招いた。これらの道路は旧市街地の街路を無視しており、「小京都」山口の景観を一変させた。昭和36年から41年にかけての山口市の中央部を横断する国道9号線の整備(現在の県営宮野大歳線)、同55年の山口バイパス(現在の国道9号線)の完成は山口市における自動車交通整備の完成を示す。しかし一方で、瑠璃光寺五重塔や洞春寺観音堂、雲谷庵などの建築物を含む北部の文化財地区と大内氏館跡(竜福寺)や築山館跡、一の坂川周辺を含む旧街区地区、旧石州街道沿いに伸びる商業地区を完全に分断してしまった。地図に見えるように、旧街区割りを無視した幹線道路はその両側で町並みの表情を一変させる。例えば、旧街区地区に

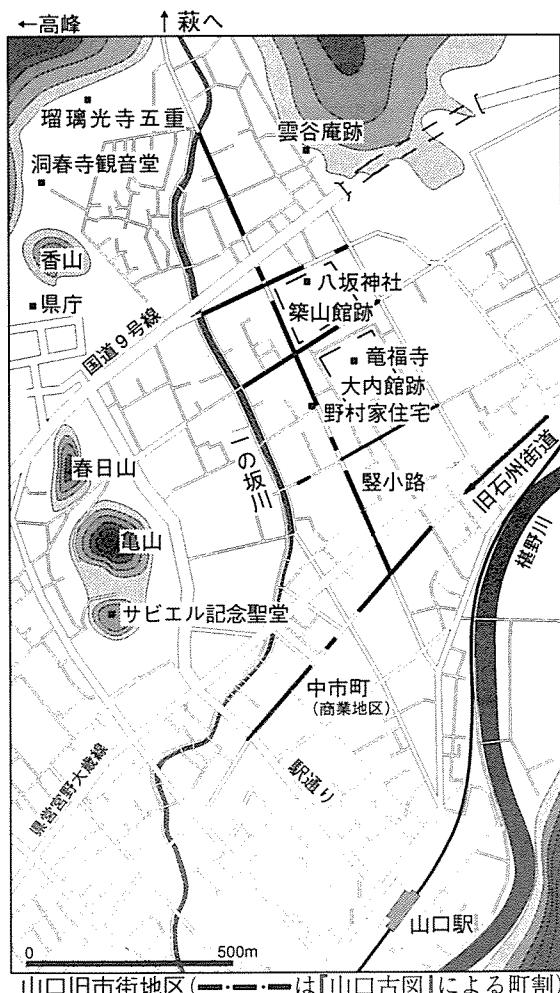
ある一の坂川河畔は景観保存地区にも指定され、古い町並みをよく伝えているが、県営宮野大歳線をわたった南側では、コンクリートで護岸された河岸とほんの数百メートルの間に10以上の大小の橋が架けられ、景観・町並みという点では悲惨な状況である。これらの幹線道路の建設以前は、山口駅から駅通りを経て、一の坂川河畔を瑠璃光寺まで散策できたという。

さいごに、町並み保存へ向けて

大内氏の「西の京」を直接伝える建造物は限られているが、豊小路や旧石州街道沿いには、まだ数多くの明治期の住宅が残されている。その多くは、個人所有のものであり、今後、歴史的町並み保存形成に向け保存の手立てを考えなければならない。その中でも、明治19年竣工の野村家住宅は山口市に寄贈され、山口の伝統工芸の展示および貸室として一般に公開されており、保存がうまく進められている例である。しかし一方では、現在の山口の景観を眺めるとき危機感を感じざるを得ない。というのは、本家の京都がかつてそうであったように、十数階建てのビルやマンションがあちこちから伸びはじめており、大内時代の山口と共有できる唯一の景観である四方を山に囲まれた眺めがビルに遮られつつある。また、明治期の住宅にも空き家が目立ち、実際に住宅として使われていても、住み手の高齢化と次の代には住み手がないという問題にも直面している。保存方法も含めた具体的な対策を早急に講じる必要があるだろう。

平成10年に市民参加型まちづくり支援の拠点として「山口住まい・まちづくりセンター」が設置された。この事業では、民家再生や景観誘導、民家・町屋に関する調査研究などを視野に入れた市民側からのまちづくりの提案を目指している。また、文化財行政においても、登録文化財制度のようなまちづくりを志向した制度がスタートしている。こうした組織、制度をうまく活用しながら今後の町並み保存・形成を機動的に進めていかなければならない。野村家住宅などの例は、いわば都市の中の「点」でありそれを「面」として広げる努力が求められている。

山口は「西の京」あるいは「小京都」と呼ばれるだけの歴史、文化的遺産をかかえた都市であることは間違いないが、「小京都」と呼ばれることに満足してはならない。すなわち、市民側からのまちづくり、あるいは登録文化財制度の活用を考えると、「小京都」としてではなく、「山口」としての個性豊かな町並み、民家・町屋を発見していく努力が必要であろう。



金森長近の城下町建設 —イメージモデルとしての小京都—

北陸・中部の城下町

土屋 敦夫

ATSUO TSUCHIYA

滋賀県立大学
人間文化学部

北陸・中部地方で、小京都として知られた城下町をいくつか造った戦国武将として、金森長近があげられよう。長近は、近世初頭の天正から慶長期にかけて、福井県から岐阜県にかけての山あいに、越前大野、飛騨高山、上有知(美濃)という3つの城下町を築いている。大野は大野盆地内の、湧き水と朝市で有名な城下町。高山は近世中期以後は天領となって町人文化が栄え、祭りや質の高い町家とその町並みで知られた町。美濃は和紙の产地として有名であり、ここにも良い町並みが残されている。残念ながら大野は大火によって古い町並みは失われているが、高山・美濃はいずれも文化庁によって伝建地区に指定されており、大野・高山・美濃はいつも小京都に数え上げられてきた。

織田信長に仕えた長近は、朝倉義景が滅ぼされたあと、天正3年(1575)越前大野郡に3万石を与えられ、まず城下町大野を築いた。城下町大野は盆地の西の亀山山頂に城を築き、堀をへだてて城に平行に一番町から五番町の横町を中心町人町として長方形ブロックの街区とし、この町人町を寺町で3方から取り囲んだ構成になっている。この大野の方格的都市形態は規模はさほど大きくなないが、きわめて明解である。山上の城とその下の城下町という関係は、信長による1563年の小牧、同じく1567年の岐阜、

図-1 大野



さらに1576年の安土と発展してゆき、城の下にきちんと長方形ブロックの都市を構成するというこの城下町のプランニングは、1585年の秀次による近江八幡で完成されたと考えられている。

次に長近は、秀吉により天正14年(1586)飛騨高山3万3千石の領主となり、1590年に高山盆地の東端の天神山に城郭を建設し、その北の江名子川と宮川にはさまれた平地に城下町高山を築いた。城下町高山は、江名子川寄りを武士町とし、宮川沿いは町人町として一之町から三之町と3筋の長方形ブロックの方格的都市形態であった。

そして長近は関ヶ原の戦いで東軍に属して戦功を立て、戦後美濃武儀郡2万3千石を加増された。長近は高山を養子可重に譲り、慶長5年(1600)この地に移り、長良川のほとりで彼にとって3度目の城下町上有知を築いた。この町づくりは、長良川を背にした尾崎丸山を小倉山と改名して、その中腹に城館を置き、一番町・二番町の2筋の町を城の正面に、並列に配置するという方格的プランであった。

この金森長近による3つの城下町のプランニングは、じつによく似ている。小高い山上に城を置き、その下に長方形ブロックの方格的な城下町を構成するという手法はまったく同じである。大野・上有知は城に対して横町、高山は縦町という違いはあるが、方格的都市形態は同じである。しかも城下町の通り筋の名を、一番町とか一之町というように番号で付けるというのも共通する。この方格的都市形態は、確かに京都に似ているが、これは京都をモデルとしたものではない。京都の都市形態はあくまでも正方形ブロックであって、長方形ではない。この長方形ブロックの方格的都市形態は、すでに触れたように天正期の城下町のプランニングの一般的手法であって、大野・高山・上有知ともまさにこの手法によっているのである。

ではこれらの町づくりが京都とは関係がないのかといえば、じつはそうではない。大いにあるのである。それは彼が親しんだ茶道、風流であった。金森家は代々茶をよくし、長近は古田織部の弟子で、子可重はのち將軍秀忠の指南役を務めている。さらに可重の長子重近(宗和)は、父に勘当され、京都へ出て茶人となり、宗和流の祖になったほどの人物であった。長近は大野において城山を亀山としており、上有知では城山をわざわざ小倉山と改名している。亀山も小倉山も、嵐山にある山名で、風光明媚なところであった。みずからが選んだ城地に、風流な京都の地名を付けているのである。つまり

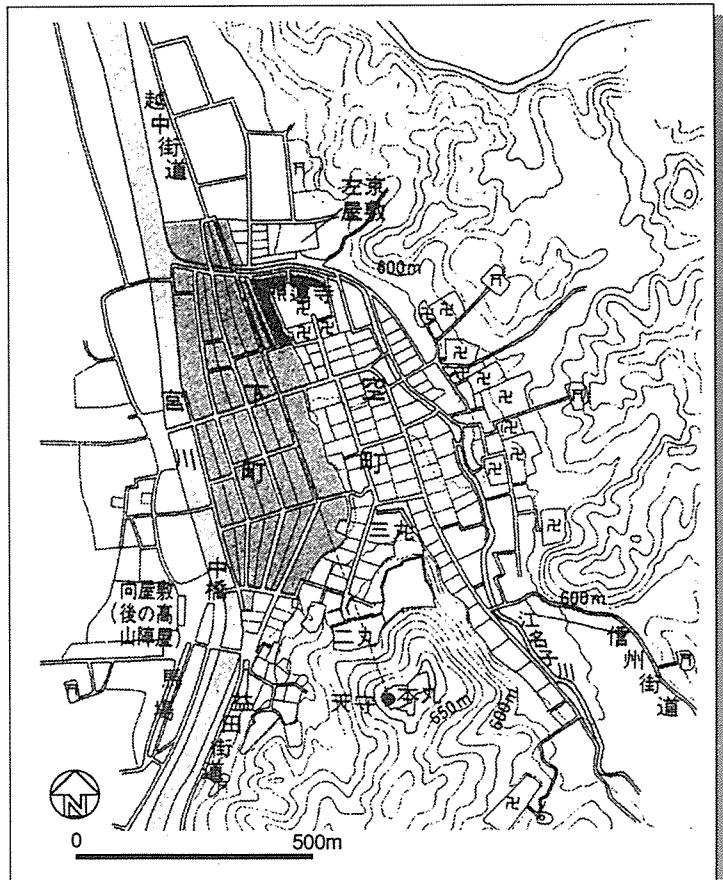
長近の城下町の風景イメージモデルは京都だったのである。

だいたい天正期の城下町は、ほとんどが平山城であり、平野の端か盆地で、川に接した小高い丘のある地点が選ばれていた。こういった所は、もともと景観要素に恵まれており、良い風景であった。それに対し慶長期の城下町は、もっと大平野の中央に進出してゆくのである。さて、平野の端か盆地で川に接するという代表的な地形は、いうまでもなく京都である。大名たちがみずから築いた城下町に、京都のイメージを重ね合わせるのはきわめて自然であった。しかもその京都は、戦国武将にとって到達すべき最終目的地であったし、洛中洛外図や実際に出かけたりして、よく知られていたのであろう。つまり京都は、城下町の計画モデルというよりも、風景イメージモデルとなっていたのである。この城下町の風景イメージモデルは、近世には文化モデルになってゆく。

城下町金沢—文化モデルとしての小京都

金沢は1546年、犀川と浅野川にはさまれた小立野台地の先端に、本願寺により北国の総本寺として金沢御坊が建てられ、寺内町として誕生した。一向宗勢力は、1580年に柴田勝家配下の佐久間盛正によって破れ、1583年からは前田利家の支配するところとなる。金沢御坊の御堂の跡地は、そのまま金

図-2 高山



沢城地として用いられた。前田氏は以後20年間に119万石の大大名に成長してゆく。

城下町金沢のプランは、きわめて複雑である。金沢の複雑さは、まず第1に台地の先端の二つの川にはさまれた城地があるため、河岸段丘の崖やそれに沿って堀として掘られた用水が複雑に入り交じることによる。第2にどんどん加賀藩が膨張したため、城の周囲にもとあった町人地を囲むように何度も武土地が拡大しており、一度に計画された城下町ではなく、計画された時代や地区によりかならずしも一貫した計画手法がとられていないということがあげられる。第3に寛永期(1630年代)の2度の大火灾によって、中心の町人町を少し外側に移動するという再開発が行われたことなどによる。こういった状況に、都市計画はじゅうぶん対応しきれていなかったようである。結局金沢は、城直下にあったほぼ環状の中心となる街道と放射状に周辺部へ伸びる街道筋を町人町にとり、その間をくもの巣状に武士町で埋めたというような形態になっていく。

城下町建設初期に、このように激しい膨張をとげた都市といえば、いうまでもなく江戸があげられる。じっさい金沢では江戸という町と、その計画手法がかなり強く意識されていたようである。享保期(18世紀前期)の加賀藩の軍学者・有沢武貞は「城ヲ中ニシテ八方へ町割ラナス者東都ノ外ニハ金府バカリ也(城下得失考)」と述べており、金沢の江戸との類似性と町割りの手法について触れている。つまり金沢は形態的には、小京都としてではなく、むしろ小江戸として意識されていたのである。

ところが、3代前田利常・5代綱紀をはじめ歴代藩主は、京の文化や産業を積極的に採り入れる。それは今でも金沢でさかんな茶・謡曲といった芸事から、加賀友禅・九谷焼・蒔絵・金工・仏壇などさまざまな伝統工芸品として金沢に根付いている。西陣織というような高級な織物だけはみられないが、そのほかの伝統産業はほぼ一式京都とおなじように金沢にそろっている。つまり金沢は文化・産業的に小京都なのである。産業というと現在では工業を思いうかべるが、当時の産業は現在では工芸と呼ばれており、ここでは芸能と工芸をまとめて文化と呼んでおこう。

小京都とその町並み

このようにみると、近世の多くの城下町で小京都といわれても、都市計画的な

手法は京都をモデルとしたものではないことがわかる。たとえその形態が方格的なグリッドパターンであっても、それは当時の一般的な城下町計画の手法であって、京都とは違っている。しかし城下町として選ばれた地点は、平野の端や盆地で、山や川に囲まれて、城郭のある丘というように、風景として優れ、結果として京都に似ていたのである。しかも城主自身、その風景を京都に重ね合わせていた。つまり風景イメージモデルとして京都があったのである。そして近世になって、城下町振興のため先進都市京都の産業の移入がはかられた。そしてそのいくつかが、伝統産業や芸能としてそれぞれの町で定着しているのである。近世において京都は、文化モデルであったのである。

そして最後にもっとも大切な町並みの残

存があげられる。小京都として呼ばれる町は、どこも良い町並みを残している。というより現在では、古いたたずまいを残している町を、すべてひっくるめて小京都という傾向さえある。しかしもともと小京都とは、ただ単に古い家並みが残っているだけでなく、もともと風光明媚なところに町が建設されており、近世には京都の産業や文化の移入がはかられ、それが定着し、地方特有の文化をつくっていったのである。

ここにとりあげた越前大野・高山・美濃・金沢などは、典型的な小京都として数えられ、良い町並みを残した町である。

そうして小京都といわれるような町を訪れるとき、その町並みだけに目をやるのではなく、その自然の風景、さらにそこでつちかわれてきた文化にも触れ、それを楽しんでほしい。

特集

4

出石町

福岡 隆夫
TAKAO FUKUOKA
(株)福岡建築事務所

冬の山陰には楽しさがいっぱい

城崎温泉でゆったりと湯に浸かり、その晩は「カニすき」で大宴会。神鍋高原で一日中スキーではしゃぎ廻り、その晩は疲れ果てて民宿で雑魚寝。両方共翌日は車で少し走り、昼食には「皿そば」。二日酔いぎみの胃袋に冷たさがしみ渡り生き返るほどうまい。生き返ったあとは、落ち着いた「古い町並み」を肩を並べて散策。

ここは兵庫県の北東部、「但馬の古都出石」である。人口1万2千人、山あいの小さな城下町であるが、その昔は5万8千石で但馬の

図-1辰鼓櫓



中心として栄えた。有子山の頂上に残る苔むした石垣、当時は太鼓を打ち鳴らして登城の刻を知らせ今ではこの町のシンボルとなっている辰鼓櫓、敵を欺くための色々な仕掛けをした武家屋敷、碁盤状の町割りなど、数多くのものが往時の繁栄と営みを彷彿と偲ばせてくれる。鉄道が通じなかつたことが幸いし、大きな発展もなく、軒の低い平入り和瓦葺き屋根と繊細な格子戸が連続する町並みは、忘れかけていた“なにか”を語りかけるように心を和ませてくれる。しかし近年、この町も観光とは別にまちづくりに関して色々な人が訪れ、大きく変貌した。

出石のまちづくり・景観整備

昭和58年、軍縮演説で国会を追放された地元選出の気骨の政治家「齊藤隆夫」を偲ぶ記念館「静思堂」が建築家宮脇檀氏の手により完成した。以後この建物を拠点として「静思塾」が生まれ、多くの人を招き学習し、また酒を酌み交わし、心豊かに、明日の出石に思いを巡らせてきた。

昭和62年、出石町中心部が兵庫県より姫路に続いて2番目に都市景観形成地区の指定を受けた。それまで近代的な安易な施工法

で、利便性、快適性を求めて、連続した町並みはあちこちで壊されていたが、地区指定により通りに面した町家の修復等に助成金が拠出されるようになり、官民一体となつた景観整備・まちづくりが展開されるようになった。

平成元年、町は”HOPE計画”を策定し、町家の住環境と景観的特性の重要さを提唱

し、引き続き推進事業として、町家の修復・改築の際の手引きとなる「町家デザインマニュアル」を作成した。これは他には見られないユニークなもので、ただ和風にしつらえるのではなく、出石の伝統的なデザイン要素を抽出し、そのデザインを大切に引用して、通りの統一感をもたせようというものである。

図-2静思堂のスケッチ

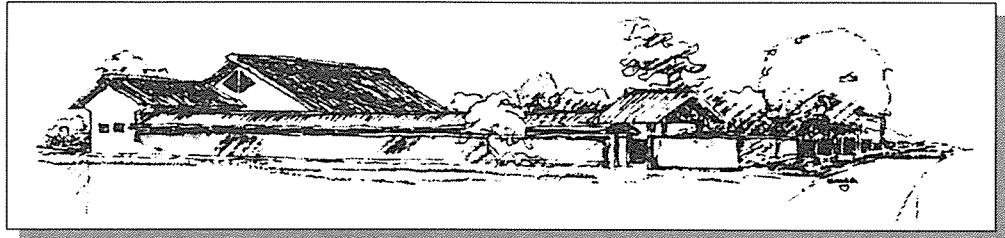


図-3出石の町並み連続立面図

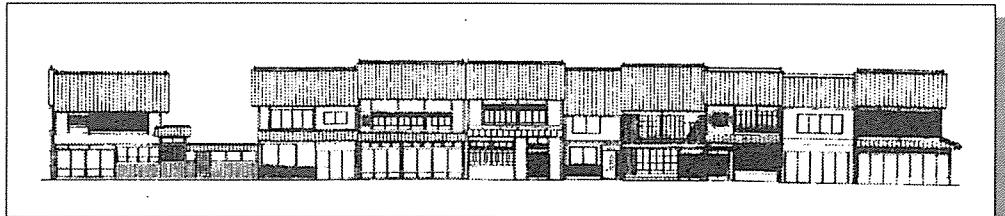
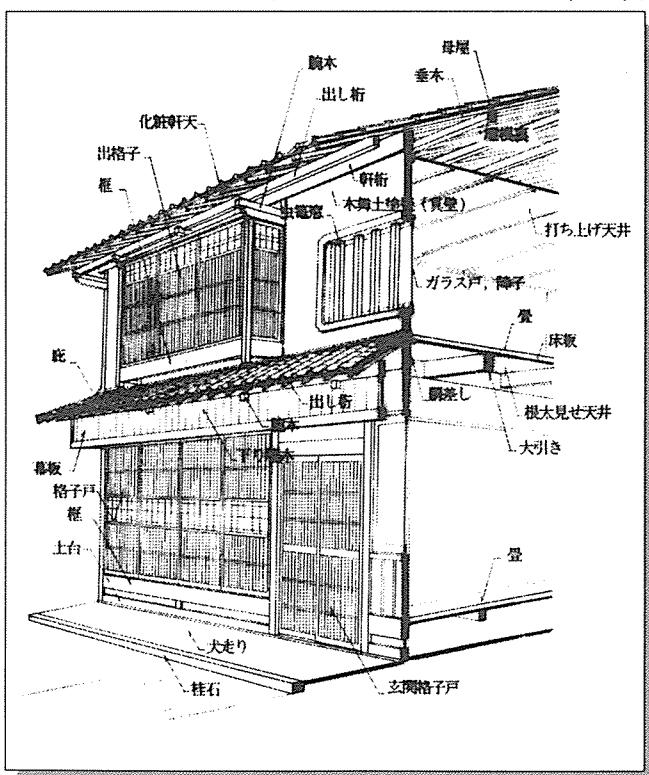


図-4デザインマニュアルの中の1頁

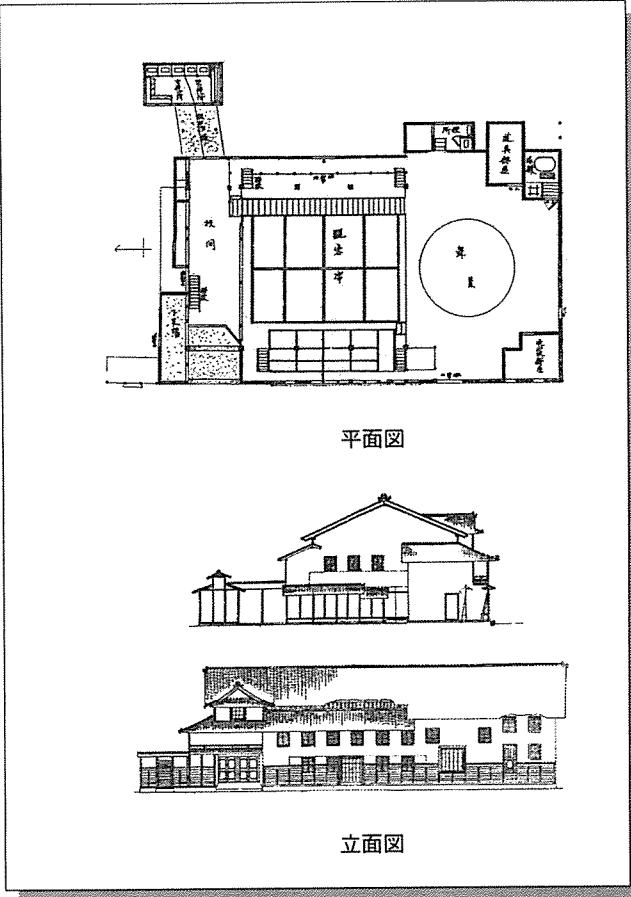


出石城下町を活かす会

都市景観地区指定と時を同じくして、第一回兵庫町並みゼミが、出石で開催され、「永楽館と酒蔵は出石の貴重なシンボル、保存再生しよう」と言う大会誓言文が採択された。その志を受け継いで翌年の昭和63年、民間主導の提案型の団体が発足された。会長を始め会員のほとんどが店主とか、会社員とかで構成され、今まで町づくりに関してほとんど無縁の人達であるが、様々な所を見て廻り勉強し、町とか県の町づくりに對して面白い提案をしている。

過去、河川・橋のシンポ、川魚を食べてふる里の味再発見、通りの変遷調査・マップづくり、町家の建て替えコンペ等に取り組んできた。そして平成6年には、日本建築士会連合会の全国大会に於て、まちづくり賞を受賞したりもした。現在は全国的に町並み保存運動が停滞ぎみで、当会も活動の場がなくじり貧状態であるが、今年に入り、当会の永年の夢であった「永楽館」の復元に対し、町の方が調査費に予算を計上し、調査を開始したことにより、又色々と活躍の場が出て来そうである。

図-5創建時の永楽館



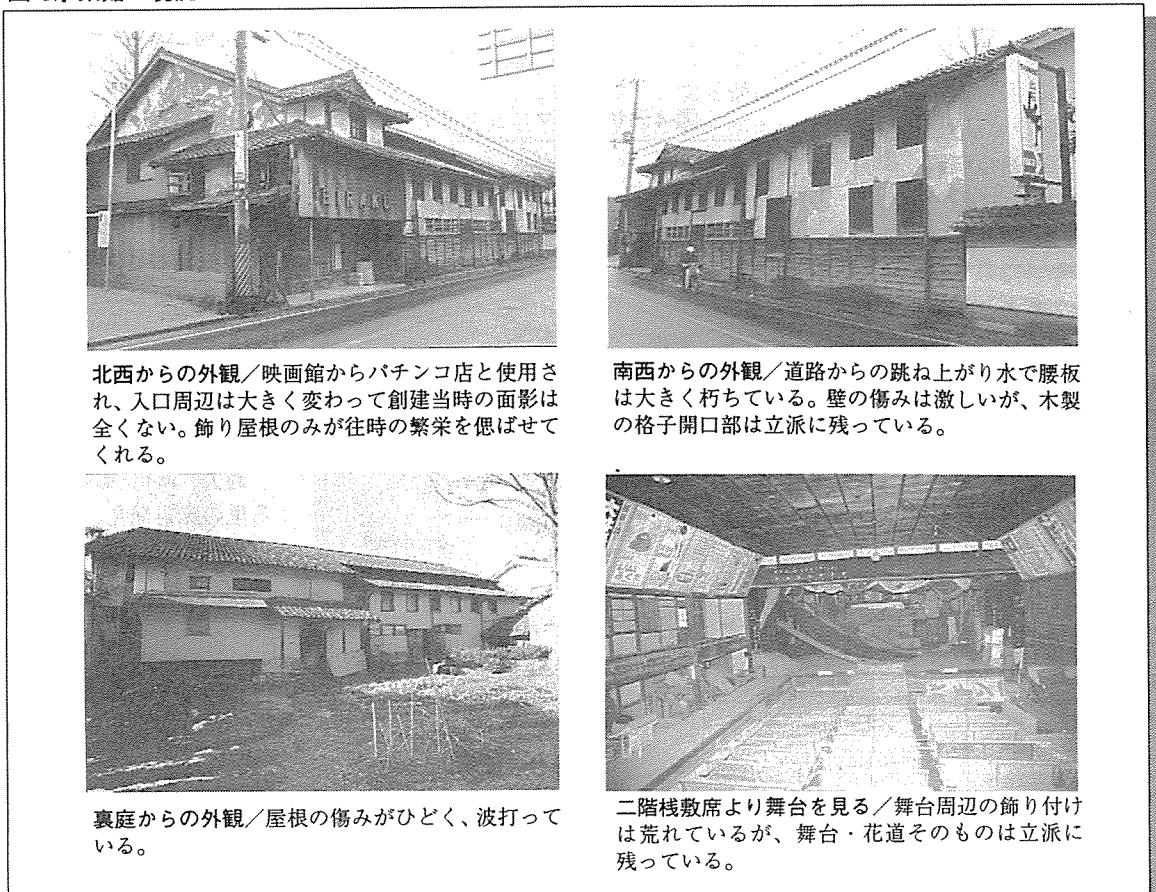
明治生まれの芝居小屋「永楽館」

明治33年に建設された永楽館は、近畿で唯一現存する木造の芝居小屋で、建設されてから一度もその場所を移ったり火災など受けたりしていない。廻り舞台、花道、スッポン、せり等が完備されており本格的な歌舞伎が上演できる造りである。昭和40年代前半まで、町民の娯楽の殿堂として栄えていたが、TVの普及などにより閉館を余儀なくされ、それ以後放置されて来た。

雨漏り等により傷みが激しく、早急な手入れが望まれていたが、個人の所有物ということで、なかなか前に進むことができなかつた。本年に入り所有者より町の方へ建物は寄贈、土地は貸与と言うことで合意された。

本格的な調査が開始されたばかりであるが、予想以上に傷みが激しく、又現行建築基準法等とのすり合わせ、文化財的な価値を保ちながらの修復等、難関は山積みであるが、基本的に創建当時の姿に戻し、歌舞伎が上演できるよう復元する予定である。完成すれば今までとは一味違う出石の魅力を、「文化度の高い誇れる出石」を全国に情報発信できるのではないか。

図-6永楽館の現況



歴史都市の連携を 目指して

富山育子

IKUKO TOMIYAMA

京都市 都市計画局
都市景観部 都市景観課

はじめに

近年、問題となっている地方都市の中心市街地の衰退は、幾度かの危機を乗り越え歴史の中を生き続けてきた私たち歴史的景観を保有する都市にとって、かつてなかつた都市そのものの存在までを問われる本当の意味の危機であるといえます。

地方都市の中心市街地は、封建時代に整備された城下町、門前町、同業者町及び茶屋町などかつての都市構成を踏襲し、そのうえに近代化を重ねてきたもので、多様な歴史と文化の蓄積装置でありました。この衰退は、都市と文化の危機であると認識し、早急に有効な手立てが必要です。

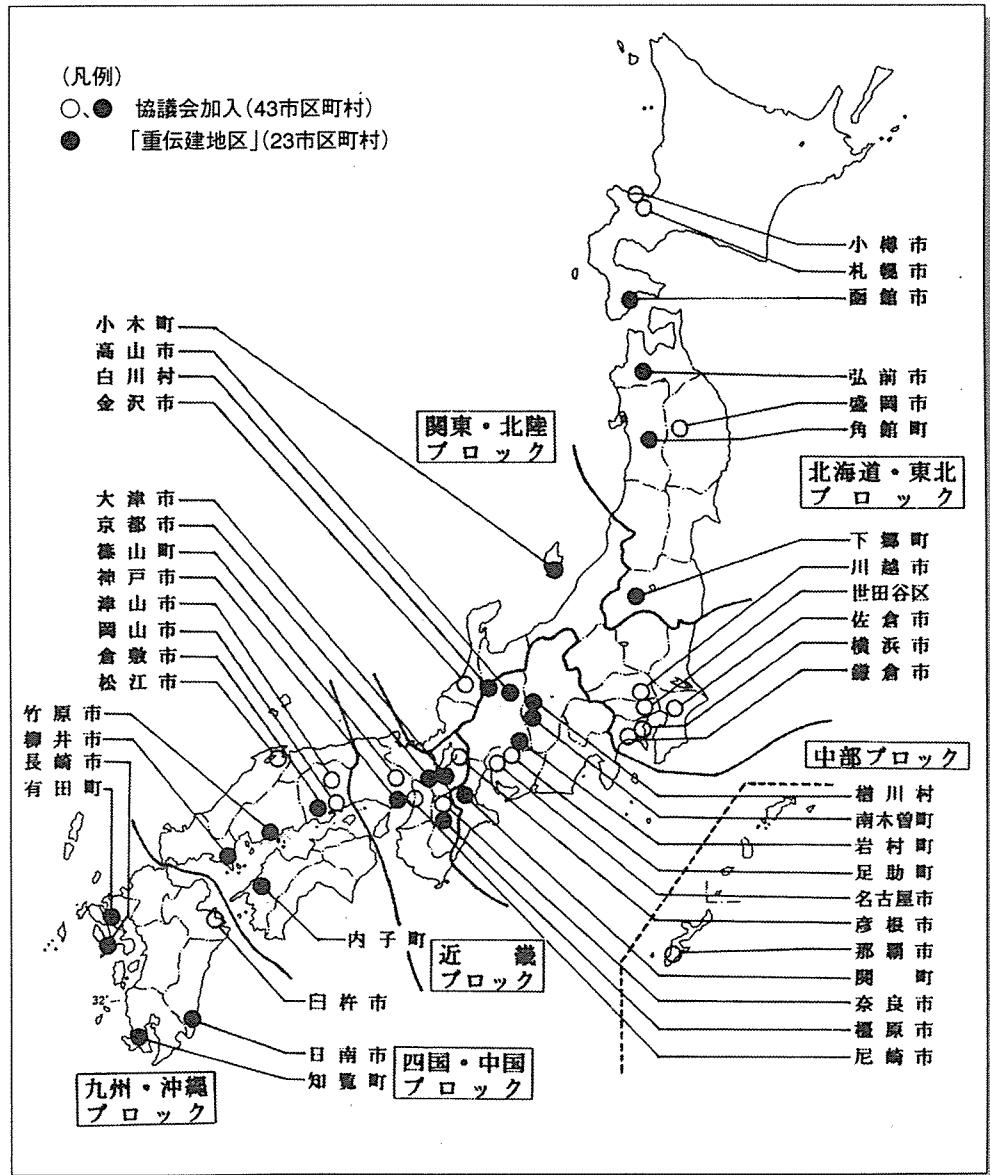
そこで、これまでの歴史的な景観を保有し、景観の整備に取り組んできた都市の連携と本市京都のあり方を振り返り、今後の展望について考えるきっかけとしたいと考えます。

1. 歴史的な町並みをめぐる様々なネットワーク

歴史的な町並みを保有しこれを活かしたまちづくり活動が全国的に注目を集め、それぞれの立場で連携を始めたのは、国内観光が国民的娯楽のひとつとなった1970年代からのことです。

以下に述べる「歴史的景観都市協議会」の結成が1973年、伝統的建造物群保存地区を保有する都市の首長で構成される「伝統的建造物群保存地区協議会」が1976年、町並み保全の活動に取り組む住民組織や市民から成り益々盛んな「全国町並み保存連盟」が1979年、小京都を自称し観光振興の立場から活動する市民団体からなる「全国京都会議」が1981年と、日本の町並みを再発見し、まちづくりが画一的な国家レベルから地方独自の個性を發揮する時代へと過渡期にあった年代でした。それまで個別に使っていた小京都という呼称が連携の共通項として浮上してきたわけです。

図-1 歴史的景観都市協議会加入市町村分布図(1998.9現在)



1981年には、京都市の自主的な市政研究会が「京都らしさ」を模索するキーワードとして他都市の目に映る京都市像を分析し、自らの実像を把握するという大胆な研究を行い注目を集めました。現在も彼らは小京都と小江戸の比較研究など、小京都を見つめ続けています。

2.歴史的景観都市協議会のこれまで

これらの様々な取り組みの中で、京都市の都市景観行政担当部局が発起人となり、それなりの役割を果たしてきたと言える歴史的景観都市協議会について紹介します。

毎年輪番制で開催されてきた歴史的景観都市協議会は、1998年の彦根での大会まで既に26回を数えました。この四半世紀の節目にあたりこれまでの歩みを振り返ってみます。歴史的景観都市事務連絡協議会は1970～71年頃、京都市が市街地の景観整備手法として市街地景観条例の制定を検討しているときの暗中模索の取り組みの中で発想されました。当時は、市街地景観の総合的な整備条例は国内では規範となる國の制度も、参考となる先例もなく、立案は困難な作業の連続であったと伝えられています。

一方、当時金沢、倉敷、盛岡、松江、高山、松江、南木曽などの各都市でもそれぞれ独自に歴史的景観保全のための条例を検討中でした。このため、歴史的な景観を保有し、保全を図っている都市が相集まり、互いに情報を交換し、国に対しての共通の要望などを協議し、各都市の景観行政の推進と国全体の政策の発展に資することを目的として、13の都市が連合し1973年に同協議会が結成され、この年に京都市で第1回大会が開催されました。

翌1974年には、伝統的な町並みの保存事業を國の制度として位置づけ、國の財政支援を求める町並み保存に関する國への要望が提出されました。早くも、1975年には文化財保護法が改正され市町村が独自の条例で守ってきた歴史的町並みが伝統的建造物群保存地区と称して文化財として位置づけられ、保存条例は市町村が定めることとなるという画期的な成果を得たのです。1976年には、7市町村が國の重要伝統的建造物群保存地区に選定され國の制度による保存事業が発足しました。

1980年代は町並みの整備だけでなく、これを支える都市基盤づくりや生活環境や施設の整備問題も新たな共通の課題となり、文化庁だけでなく建設省からも担当官を講師に迎え真剣な討議を重ね、國の景観整備政策を推進する原動力の一つとしての役割を果たしてきました。景観を阻害する電線類の地中化の取り組み提案をねばり強く続け、今や景

観づくりのセオリーにまでなりつつあるのも、大きな成果です。

1990年代は、国際化社会の進展、バブル経済の到来と崩壊、阪神淡路大震災による甚大な被害による衝撃などを経て、わが國の社会経済構造は歴史的な変化の途上にあり、まちづくりは大きく変化しています。市民のライフスタイルや価値観も、物の豊かさから心の豊かさへと変化し、経済優先の制度や慣行を見直し、うるおいのある成熟した社会が望まれています。私たちの景観まちづくりにも安全性、利便性に加えて、うるおいや快適性など多様な意義、多様な発現手法が求められ、協議会での議論の焦点も住民参加のあり方やまちづくりのソフトの仕組みが中心になってきています。

都市間競争の時代の今こそ歴史的な個性の蓄積を持つ我々の出番なのです。

3.歴史的都市をめぐる動向と今後の展望

しかし、全国で着実に実践され結実しようとしているまちづくりが、地方都市の中心市街地の衰退というこれまで以上に困難な状況に直面し、これに歴史的都市も巻き込まれています。長期化した不況に対し、経済は先行きの不透明感が高まり、市民の生活は動搖しています。これは、商店街の崩壊など経済面だけでなく、生活や交流の場である都市のあり方の転換を迫られている象徴的な問題点で、私は以下の3つのそれが原因となり結果となって進行していると考えます。

- ①モータリゼイションの進展により、地方都市周辺市街地に大規模商業施設が立地し、公益施設も地価の低い周辺部に立地し、交流拠点機能を喪失した。
- ②少子化・高齢化や人口の流出により、地域コミュニティの担い手が不在で、相互関係が希薄になってきている。
- ③土地が細分化し、高地価と複雑な権利関係が建築物の更新や道路及び公園などの基盤整備を阻み、老朽密集市街地化している。

こうした状況の中で、かつての経済発展と景観保全を二極的な概念ととらえていた時代と異なり、都市そのものを再生させるファンクションキーとして歴史的資産や歴史的環境がこれからの中と市民の暮らしに与える価値や意味を問い合わせ、都opolisticの中改めて位置づけたいと考えます。

このような取り組みは、かつての地方中心市街地が包蔵し、歴史を継承し、生活文化を支えていた住民の相互関係が生み出す創造的活力を原動力とし、専門家や行政がそれを支えていかなければなりません。

現在この都市連合で共通の課題の解決に向けて、かつてない体系的な調査研究を行うことを提唱しており、そのアイデアを練っているところです。

4. 京都市が果たす役割

さて、京都の近年も困難な状況は続いています。京都市においても、景観の変貌と、都市の魅力の相対的な低下に対し、都市存亡の危機が叫ばれて久しいですが、景観問題は1990年代の初頭に噴出し、このため、「新京都市基本計画」及び「まちづくり審議会(市長の諮問機関)答申」等、これから都市像を示す上位計画が発表され、土地利用問題と都市景観整備が、特に重要な課題として位置づけられ、緊急の取り組みとして景観整備制度の立案に着手しました。ここでは詳述しませんが、景観整備政策は他の都市政策に先行し1995年3月に自然風景と市街地景観を保全・再生・創造する体系的な制度を創出し、翌1996年から運用を開始しています。

京都は山紫水明の都として、盆地を流れる川を庭園の流水と見立てて、三周の山並みを背景として都市づくりが行われ、日本の内陸都市のモデルとして景観づくりの先導的役割を果たしてきました。今度の制度は何より京都の景観構成の道具立て(図-2参照)を分析し、丁寧に組み立てたものです。このような京都と類似する景観構成を持つ内陸都市の景観づくりと都市に魅力の再生に知恵と力を發揮し、その一助となりたいと考えます。

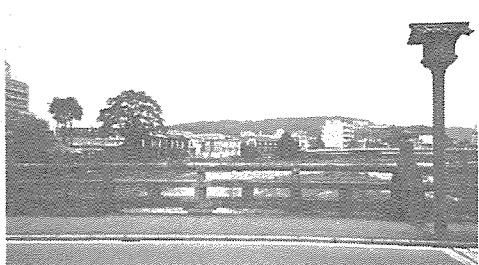
おわりに

都市の景観は、経済活動、都市機能や居住環境、自然環境など、人々の生活の営み全てを包括する様々な都市問題が象徴的に現れたものです。景観まちづくりの作業は、専門的知識と総合的な文化歴史芸術など幅広い知見と普遍性のある美意識に支えられた応用力を要求されるもので、都市政策の技術として多くの方々の英知を結集し育んでゆくべきものと考えます。

図-2 景観構成の道具立て(京都と高山・盛岡)



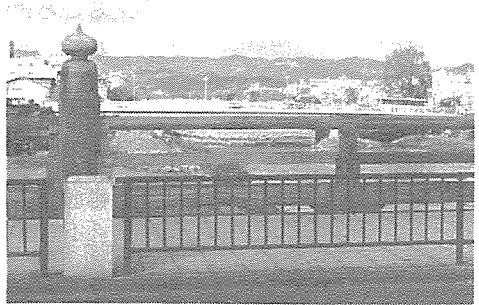
高山三町／伝統的建造物群保存地区



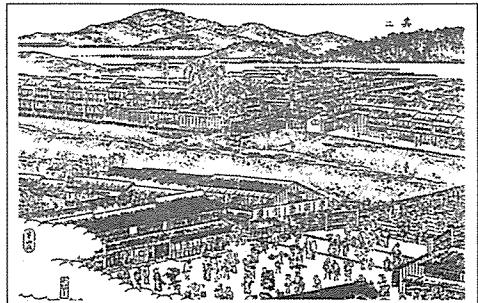
盛岡市／北上川に架かる中の橋



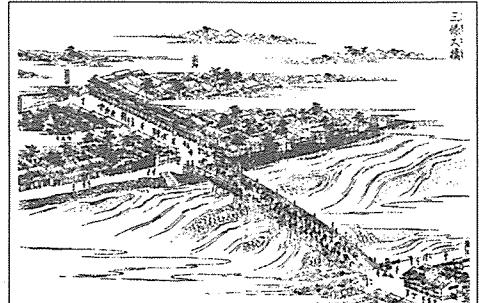
京都市祇園新橋／伝統的建造物群保存地区



京都市／鴨川に架かる三条大橋



京都市／四条橋(「花名所図会」より)



京都市／三条大橋(安永元年「都市名所図会」卷1)

「小京都」と呼ばれる まちへのアンケート

河本一行
KAZUYUKI KOHMOTO
(株)シェラプラン

たまたま「小京都」と呼ばれたり「全国京都会議」などを通じて京都との関係を深めておられる全国53市町の関係者の方々に、JUDI NEWS「特集：小京都」編集にあたり独自にアンケートし、45の市町から回答をいただいた。

●「小京都」らしさは、まず形から

Q1. 「小京都」らしさの要素として、全体の80%の自治体が「町並み」を第一に上げ、「社寺」59%や「城下町」57%など、50%を越える回答はすべてが外観的な要素に偏っている。また、文化・伝統産業ではそれぞれ地域の特色が出ており、多少のバラツキが見られた。

Q2. 「小京都」としてのイメージアップでは、「歴史的環境の修景事業や町並み景観の整備」を78%の人が回答している。「京都」らしさを高めるには、まず形からはいり、次に、文化・伝統産業などの精神面、伝統や技術の継承と発展が「小京都」らしさの課題と考えられているようである。

●京都の「模倣性」と「独自性」とのジレンマ

Q5「問題点・課題」で、独自性に関する記述が多かったのは、「小京都」である限り「京都」を越えられないという現実と、一方では京都のもつ文化・歴史的価値のアピール力、ブランド力を借りて地域イメージを高めたいとする自治体のジレンマが読み取れる。また、その自治体の置かれている立場によって独自性に対する考え方の強弱が出ていた。たとえば、ある程度「京都」に負けない面をもつ自治体などでは、「小京都」と呼ばれることに抵抗感があったり、「京都」にはない独自の歴史伝統を保存振興していくとする意見が強いようにも思われた。

●「小京都」の呼び名には好感的

しかし、全体的には、「小京都」と呼ばれることに対して、好感をもって受け入れられているようだ(Q4)。「京都」1200年の文化、歴史・伝統はやはり世界的にもゆるぎのないものであり、誰もが認めているということなのだろう。

●観光振興としての「小京都」

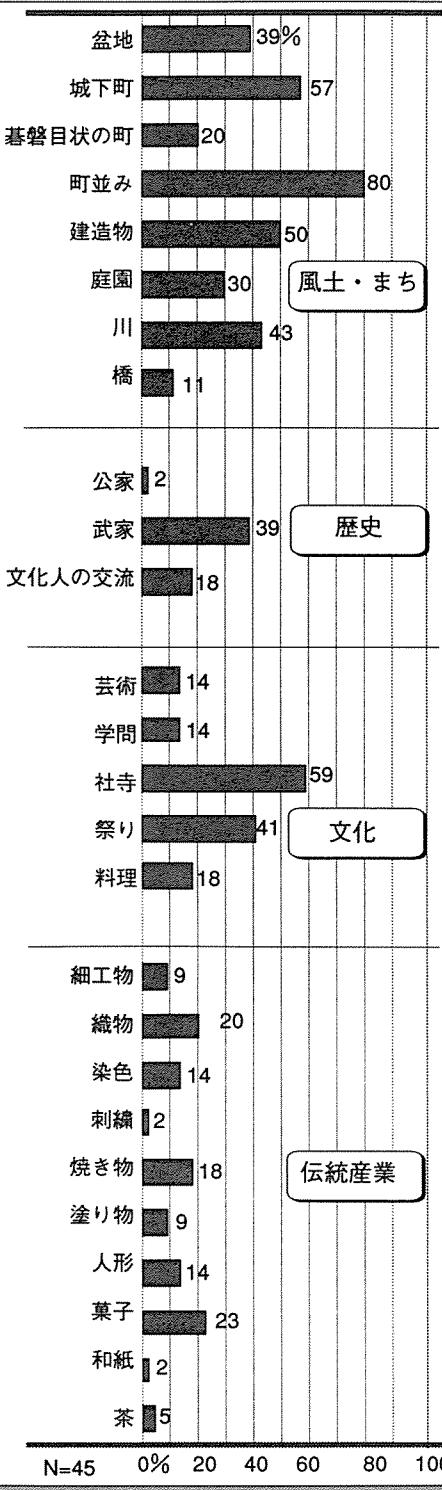
「小京都」と呼ばれる市町は全国に相当数あり、また「小京都」と呼ばれたい市町まで含めるとかなりの数にのぼる。たとえば、(社)京都市観光協会が事務局となっている「全国京都会議」には54市町(1998.10)あり、毎年参加団体が増えているという。各団体の窓口は観光協会が43%を占めており、Q3.「京都」の何を学びたいかでは、「文化・歴史的価値のアピール力」と「集客力」の2つで80%を占めるなど、特に観光面での地域振興を期待していることがうかがえる。各市町の人口規模では、京都市の146万人に対し、金沢市の45万人、盛岡市の29万人等を

除くと、殆どは小規模で、5万人以下の市町が30団体を占める。

全国の「小京都」は、京都と関係をもつことによって自分たちのまちをアピールし、そして独自性のあるまちづくりをめざしている。「京都」自身も、これら市町と連携を図ることによって伝統産業や文化など、精神面、ソフト面を発信し、より強く全国にアピールしていくことが京都自身の独自性強化につながるのではないだろうか。

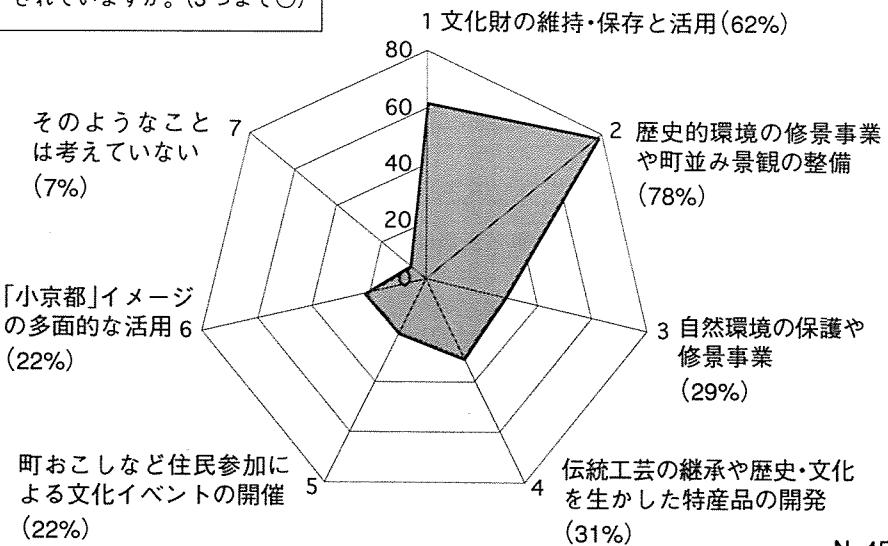
「町並み」が「小京都」らしさの第一位。

Q1. あなたのまちの「小京都」らしさに該当するものすべてに○をつけて下さい。



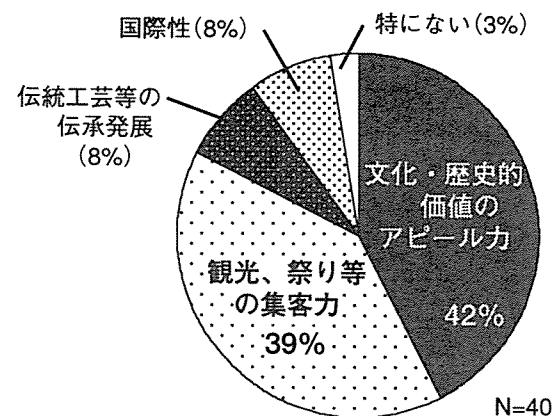
小京都としてのイメージアップの取り組みは、「歴史的環境の修景事業や町並み景観の整備」等のハード面での整備をあげる回答が78%。

Q2. 「小京都」としてのイメージアップにどのような取り組みをされていますか。(3つまで○)



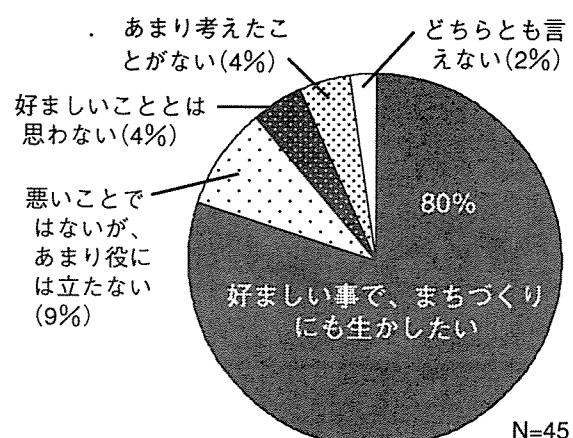
京都の「文化・歴史的価値のアピール力」、「観光、祭り等の集客力」を学びたいとする回答が81%。

Q3. あなたのまちの発展のために「京都」の何を学びたいですか。(最も近いものに1つ○)



「小京都」と呼ばれることに80%の人が好感をもっているのに対して、否定的な回答も13%を占める。

Q4. あなたのまちが「小京都」と呼ばれることについてどのような考え方をお持ちですか。個人としての感想をお聞かせ下さい。(1つ○)



「京都」のブランド力を借りつつも京都にはない独自の歴史文化を育てていきたいとする意見や、伝統産業の育成、保存と開発、地元との協議調整などが課題。

Q5.「小京都」として、まちづくりや環境デザインに取り組むまでの問題点・課題

小京都のイメージ

- 小京都は、小さな京都というイメージにとられている。
- 「小京都」のイメージは画一的な歴史的景観を想像させるため、好ましくない。
- 小京都としてのイメージを崩さない様な町並みの整備を行いながらも、現代の生活環境に合った道路の改良等、保存と改善をバランス良く推進して行きたい。

独自性

- 地域それぞれ、京都にはないすばらしいものが存在する。これをアピールしたい。
- 「日本の古都のすばらしさ」をテーマに世界にアピールしたい。
- 歴史的景観都市として、京都から学ぶべきところはたくさんあるが、まちにはそれぞれの個性がある。京都とは違う個性・価値を探りあて行く努力が必要。
- 時代が変わっても、生き残れる伝統を重んじた街づくり。
- 歴史的・文化的環境や景観について単なる保存や再生ではなく、どのように活用していくかが課題。
- 全国一律の街づくり(観光地)ではダメである。
- 京都とは違う個性・価値を探りあて行く努力が必要。
- 「小京都」のイメージだけでなく、独自の個性的なまちづくりをいかにしてすすめていくかが課題。
- 京都にあっても、この地にはなかった歴史的なデザインや様式を、安易に取り入れることのないようにし、伝統や地域性を大切にしたい。
- 各地の歴史的町並を保存するうえで、それぞれの歴史的変遷や景観の独自性が最も重要である。
- 「小京都」ではなく、城下町として町づくりに取り組んでいる。

伝統産業の振興

- 伝統工芸品の伝承と後継者の育成。
- 伝統工芸品の製品の市場開拓。
- 食文化の向上、郷土料理の開拓。

財政面

- 古い町並み保存を図るため、助成制度を今後設ける事による財政面。
- 経済的な資源がない。
- 宗派の違う寺の連携、寺に対する補助金。

住民の理解・協力

- 「重要伝統的建造物群保存地区」の指定を受けたが、整備を進めるに当たり、地元住民の理解を得ていく事が大切。
- 町づくり整備をしていく上での地元の住民との交渉が課題。
- 町並み保存については生活者と観光客との共存が難しい。
- 歴史的建造物などはあるが、京風の町並みとかイメージというものが皆無である。「小京都」のイメージづくりをしていく上で、なかなか住民の合意を得られない。

保存と開発整備等

- 開発により町並み景観が壊されるごとへの危惧。
- 伝統的建造物群保存地区を中心とした市街地及び周辺の山並みを含めた都市景観条例の制定。
- 防災対策としての施設・設備の整備と排水設備・都市下水の整備。
- 古くから残る商家の町並みや白壁の土蔵群は、従来から観光資源となっていたが、土蔵を利用した新たな観光施設を整備した。

サイン等

- 町のイメージにあったサインの整備。
- サイン等観光案内の充実。

その他

- 高齢化と人口減少により街自体の活力が低下。
- 高齢化に伴う空家対策と維持管理。
- 空地化、駐車場化の現象が発生。
- 観光地化していない。

全国京都会議会員

北海道	松前町
青森県	弘前市
	盛岡市
岩手県	遠野市
	水沢市
宮城県	村田町
	角館町
秋田県	湯沢市
	山形県
山形県	酒田市
	山形市
栃木県	栃木市
	足利市
栃木県	佐野市
	小川町
埼玉県	嵐山町
	古河市
茨城県	新潟県
	加茂市
富山県	富山市
	城端町
石川県	金沢市
	大野市
福井県	小浜市
	飯山市
長野県	松本市
	飯田市
岐阜県	高山市
	八幡町
愛知県	西尾市
	犬山市
三重県	上野市
京都府	京都市
	篠山町
兵庫県	出石町
	龍野市
鳥取県	倉吉市
	松江市
島根県	津和野町
	津山市
岡山県	高梁市
	尾道市
広島県	竹原市
	三次市
山口県	山口市
	萩市
愛媛県	大洲市
徳島県	那賀川町
高知県	安芸市
	中村市
福岡県	甘木市
佐賀県	小城町
	伊万里市
熊本県	人吉市
大分県	日田市
宮崎県	日南市
鹿児島県	知覧町

資料：(社)京都市観光協会
98.10現在 / 会員数54団体

10周年に向けて、組織と活動の見直しを！

■第8期全国ブロック幹事会報告

伊藤 洋

ITOH YO

代表幹事

(㈲)CAU・プランニング

■本年の全国ブロック幹事会は、去る11月14日（土）朝9時、九州ブロックが主催した「フォーラム：『福岡の“都市デザイン”その脈略と未来』」に先だって、福岡市中州に近い博多東急ホテル会議室において開催された。北海道を除く各ブロック幹事をはじめ、委員長、監査役、代表幹事、計20名が出席した。

■各ブロック・委員会からの報告は、2年後の本会設立10周年に向けて、活動や組織を見直す視点からの意見報告が多かった。

■ブロック内の会員分布や、活動の偏りを問題とする視点からは、会員のいない所や各県持ち回りでの例会やシンポジウムの開催、各県に均等に予算を配分して、県毎の活動促進など、活動活性化策を講じようとしている。

また会員の増強面では行政マンが入会しやすいシステムの要請もあった。

■活動内容では、魅力を持たせることが必要でインターネットの活用も魅力のひとつとしているとともに、社会への提案や提言と社会的認知は切り離せないとして、社会的な活動周知の問題が提起された。

■地域に見合った活動方法を望み模索する意見も多く、集まることの意味や存続する意味から、ブロックよりも小さい単位（サブブロック）での活動を強化していく構想も提案された。

そして、今までブロック内では均等の活動・組織を求める理想が強すぎたのではないかとの疑問、ブロック内で極めて出るのは仕方がないとし、むしろメリットを創りだす方向で考えたいとする意見も出された。

■今後各ブロックでは、会員・活動・組織の課題に対し各地方毎の工夫を持って臨むことが望まれる。代表幹事会では、それを受けてメリット論やサブブロックの話を検討したい。

■10周年に向けては、

1. 10周年事業を2001年春をめどに実施すること
2. 統一テーマを設定すること
3. 協力金の呼びかけは窓口を一つにすること

などの、フレームが提案された。

■10周年として特別事業を行うほかにも、今まで進めている事業を10周年に完成させることの重要性も指摘された。

- デザインガイドブックは、雑誌に連載で執筆し、合本を出版すること
- メンバーズプロフィールは事業委員会又は特別な編集委員会を作つて行うこと
- 10周年を期にNPOを考えたいなどが提案・報告された。

■組織全体の問題としては、引き続き経費の節減、費用を捻出できる事業の検討を行い、予算の組み方を考える必要などが提起された。

■最後に、次回第9期全国ブロック幹事会は、中部ブロックでの開催を検討することを決めて議事を終了した。

フォーラムとブロック幹事会の開催に向けて、多大の努力を払われた九州ブロックの方々に御礼を申し上げたい。



第8期全国ブロック幹事会(福岡市)

■中部ブロック

谷口 庄一
TANIGUCHI SHOICHI
日本工営㈱

◆JUDIサロン（都市環境デザイン会議中部ブロック研究例会）報告

中部ブロックでは1～2ヶ月に一度の割合で、中部ブロック会員が持ち回りでナビゲーターとなって会員外にも開かれた「JUDIサロン（都市環境デザイン会議中部ブロック研究例会）」を開催してきました。11月28日に名古屋市立大学芸術工学部にて同学部瀬口哲夫教授をゲストナビゲーターに迎えて13回目のJUDIサロンを開催し、参加者も延べ400名を越えるに至りました。

近日このJUDIサロン開催一周年を記念してJUDIサロンの記録集を発刊する準備を行なっております。

JUDIサロン（都市環境デザイン会議中部ブロック研究例会）開催一覧

●第1回 97年3月1日 ナディアパーク国際デザインセンター

ナビゲーター 集山一廣：(株)竹中工務店名古屋支店

「岐阜神田通修景計画にみるパブリックアート」

●第2回 97年4月5日 ナディアパーク国際デザインセンター

ナビゲーター 繁野 瞬：(株)U.S.計画研究所

「建築と土木との対話そしてソフトとしての事業計画」

—デンパーク等のプロジェクトを通して—

●第3回 97年5月24日 丈山苑、デンパーク（安城産業文化公園）

ナビゲーター 繁野 瞬：(株)U.S.計画研究所

集山一廣：(株)竹中工務店名古屋支店

「地方都市におけるランドスケープの方向と可能性」

●第4回 97年6月21日 ナディアパーク国際デザインセンター

ナビゲーター 澤田晴委智郎：(株)澤田造景研究所

「風の神殿」—棄てられるもの・創られるもの—

●第5回 97年7月26日 ナディアパーク国際デザインセンター

ナビゲーター 谷口庄一：日本工営(株)名古屋支店

「なぜドイツが手本なのか」—住民への情報公開の実例を踏まえて—

「愛知万博報告」—モナコでの市民活動に参加して—

●第6回 97年8月30日 古今伝授の里・フィールドミュージアム
ゲストナビゲーター 水野正文 古今伝授

の里フィールドミュージアム館長

「古今伝授の里とまちづくり」

●第7回 97年9月20日 ナディアパーク国際デザインセンター

ナビゲーター 家田 宏：(株)景観工学研究所

「まちづくりとデザイン」—まちづくりにおけるデザインの実践—

●第8回 97年10月25日 ナディアパーク国際デザインセンター

ナビゲーター 夢童由里子：造形作家

「尾張文化の源流」—まちづくり・ゆめづくり—

●第9回 97年11月15日 ナディアパーク国際デザインセンター

ゲストナビゲーター 吉田利二：吉田造園(株)常務取締役

後藤卓：(有)ラックランド東海代表取締役
「環境の浄化」—セラミック炭の効用—

●第10回 97年12月5日 ナディアパーク国際デザインセンター

ナビゲーター 奥山健二：名古屋市立大学芸術工学部教授

「フランスボルドー地方の田舎と15世紀に造られた運河の旅」

●第11回 98年1月17日 ナディアパーク国際デザインセンター

ゲストナビゲーター 後藤美佳子：花フェスタ記念公園・(財)岐阜県公園緑地協会

「花と暮らす、自然と暮らす」—今、なぜガーデニングブームなのか—

●第12回 98年9月5日 ナディアパーク国際デザインセンター

ナビゲーター 松永一生：TACK色彩研究所主宰

「色彩と都市景観」

●第13回 98年11月28日 名古屋市立大学芸術工学部

ゲストナビゲーター 瀬口哲夫：名古屋市立大学芸術工学部教授

「名古屋市立大学芸術工学部におけるアーバンデザイン（都市環境デザイン）教育の実践」

◆都市環境デザイン会議シンポジウム'98開催報告

12月5日（土）に名古屋の産業技術記念館におきましてJUDI研修研究委員会と共に「都市環境デザイン会議シンポジウム'98」を開催致しました。

これまで中部ブロックでは、JUDIサロンで都市環境デザインに関してさまざまな議論がなされてきましたが、こういった活動を一度整理して中部地方にとっての都市環境デザインに関する問題意識を中部の人々

や中部で都市環境デザインを学ぶ若い人たちと共有していくことを目的としています。中部地方には中部新国際空港、2001年日本国際博覧会、第二東名・名神高速道路、リニア新幹線、首都移転など中部地方には21世紀に向けたプロジェクトが数多く進行しているなかで、この地方の歴史・文化・地域の自立性といった視点でこれらのプロジェクトをどのように捉えていくべきかが問われています。

そこで、この地域の都市環境デザインに携わるものとして今一度地域を見つめ直すことによってこのようなプロジェクトに対してどのように関わっていくのかといった視座を議論してみようというものです。当日や愛知、岐阜、三重、静岡から約140名が参加し、繁野会員の進行でパネラーと参加者との間で活発な意見交換が行なわれました。今後も、JUDIサロンと平行して年に1~2回を目標にシンポジウムを開催す

る予定です。

都市環境デザイン会議シンポジウム '98

■テーマ：「都市環境デザインにおけるヴァナキュラーの展開」

■場 所：産業技術記念館大ホール

■日 時：平成10年12月5日（土）

■パネラー：

東 恵子（東海大学短期大学部助教授）

成瀬恵宏（都市設計工房）

加藤和雄（状況空間研究所）

井口勝文（竹中工務店開発計画本部）

コーディネーター：

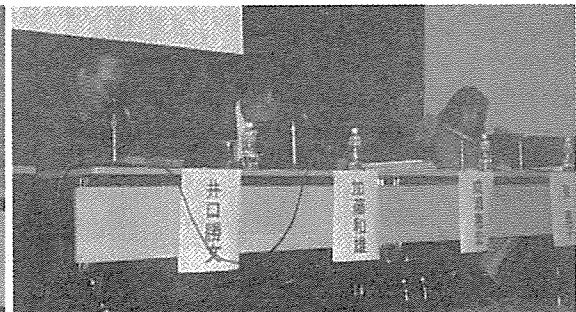
繁野 舜（U.S.計画研究所）

■後 援：名古屋市、愛知県、岐阜県、三重県、（財）都市づくりパブリックデザインセンター

■協 賛：INAX、日本軽金属、リョーワ、日本街路灯製造、ハンド、柿の木



コーディネーターの繁野氏



シンポジウムパネラー



シンポジウム会場の風景

■関東ブロック

作山 康

SAKUYAMA YASUSHI

関東ブロック幹事

株式会社都市環境研究所

第2回ヨコハマ都市デザインフォーラム・都市デザイン専門家会議

11月21日（土）ヨコハマ都市デザインフォーラムの一つのプログラムとして開催された都市デザイン専門家会議は、専門家や行政職員、一般市民、学生など約120人が集まり、「都市デザインの専門家間のコラボレーション」をテーマに、パネリストの事例紹介とコラボレーションの課題と可能性などについて白熱した議論が展開された。

コーディネーター：高橋志保彦、土田旭
スピーカー：曾根幸一、藤江秀一、中野恒明、松村みち子、吉田慎悟、東海林弘靖、西脇敏夫〔順不同〕

●問題提起の概要

- (1)マスター・アーキテクト制度、コミッショナー制度など、大規模なプロジェクトを中心で試行されている専門家間のコラボレーションの評価
- (2)市民、行政を含めたコラボレーションのあり方
- (3)コラボレーションが行われる上での社会システムの構築

●主な論点

- (1) 20世紀は分業化、専門化の時代で、今後、総合化が必要である。都市環境デザイン会議はそのために活動している。
- (2) コラボレーションは関係性が複雑なため調整が困難、しかも設計報酬が細分化されてしまう問題がある。
- (3) 専門家がボランティアではいけない。適正な報酬確保のためには、コラボレーションを前提とした発注の仕組みの確立化、発注者の見識が必要で、さらに文化的価値を社会一般が、認めてくれるよう運動が必要である。
- (4) コラボレーションは創造的転換の場として有効で、協働者の力を入れて、新たなものを生み出す効果がある。
- (5) 専門家は、同じスタンスで議論が必要なことが必要、そのため下請けの関係では、うまくいかない。

- (6) ディレクターは、いかなる目的でコラボレートするのかを考える必要がある。

- ・ビジョンが明確で、コラボレーションの性質を知つていて実践する。
- ・知恵を出すために或いは、新たな個性を生み出すために、コラボレートする。

- (7) 大規模プロジェクト等、多くの専門家が関わるのはコラボレーションとは違い、単に分業化である。

- (8) マスター・アーキテクト制度は、一人のイメージでつくるものであるが、調整型のコミッショナー制度は、どんなものができるか分からぬ部分があるが、より可能性も広がる。

- (9) 人脈、コネクションで選ぶのではなく、計画の質で選んで欲しい。

- (10) ものの集合では、デザインではない。今後はソフト系の人と、ものづくりの人とのコラボレーションが必要である。

- (11) 今後、小規模プロジェクトや再生などが多くなり、住民との関わりが多くなる。このように社会的に異なる立場の意見も、企画段階や設計段階で効果的に入れるべきである。

- (12) コラボレーションでの議論のぶつかり合いのなかから、より質の高いものが生まれる。

- (13) 大きな時間の流れのなかではまちを見守る自治体が総合的なコーディネート役になる場合が多い。

- (14) コラボレーションは、設計の場面だけでなく、事業をする人、計画を立てる人、管理運営する人、利用する人など様々な協同関係が成立する。

●まとめ

- (1) より質を高めるために、プロジェクトの初期の段階から、互いに関わり合う工夫をしていく。
- (2) コラボレーションは上下関係でもなく、プロジェクトの大小にも関わらず、同等な関係の上に成り立つもので、専門家もそのスタンスで望む。
- (3) 専門家が果たす役割を社会的に認識してもらうために、活動を進めていく。
- (4) 創りだしたもののが都市のなかで継続して使われるために、維持管理や利用を考えて、市民や行政を含めたコラボレーションが必要で、専門家もより積極的に関わっていく。
- (5) よりよい都市環境を創るために新しい価値を創造することが必要で、そのために市民、行政、専門家の取組みによるコラボレーションを取り入れる意識の変革をしていくべきである。



専門家会議の会場風景

■関西ブロック

長谷川 弘直
HASEGAWA HIRONAO
関西ブロック幹事
株都市環境計画研究所

関西ブロックは例年、10回のセミナーと夏の海外交流セミナー秋のフォーラム関西を開催しています。セミナーはテーマによって参加人員の増減がありますが、概ね40人前後で行われています。

今年の海外交流セミナーはインドネシアのバリとジャワで行われ、関西及び他のブロックを含めて16名が参加いたしました。11月20日（金）に行われた第7回フォーラム関西98は、テーマ「大地への取り組み」で参加者は約140名でした。また、ブロックの総会は12月19日（土）中央電気クラブでセミナー「日本におけるユニバーサルデザインを考える」の開催とあわせ行います。

●セミナー・フォーラム報告

<第7回セミナー>

8月22日（土）中央電気クラブ

テーマ：「都市案内の研究」

司会：小浦久子（大阪大学）

報告1：「都市案内から都市を見る」

田端修（大阪芸術大学）

報告2：「情報化時代における都市案内」

橋爪紳也（京都精華大学）

コメンテーター：林野博司（京都工芸繊維大学）

<第8回セミナー海外交流その2

ジャワ&バリ／インドネシア>

昨年のイタリアにつづき、第2回JUDI関西海外セミナーをインドネシアにて開催した。ジャワにおける伝統産業の活性化などもねらった町家地区や伝統集落の保全型まちづくり、バリにおける独特のコスモロジ

ーにもとづいた伝統的集落の空間構成や自然との共生である人々の暮らしぶりなどは、我が国におけるこれからのまちづくりや環境デザインを考える上で示唆と刺激に富んでいた。このセミナーは大阪大学と交流のあるガジャマダ大学の協力によって実現したものであり、これを機会に様々な面で交流を続けていきたいと願っている。

○テーマ「歴史的都市の保全と活性化」

○1998年9月21日（月）～28日（月）

○参加者 16名

○プログラム

■ジャワ編（ガジャマダ大学建築学科との共催）

9月22日／ジョグジャカルタ市内視察

・目抜き通り、外国人観光拠点地区、王宮、水の宮殿

・コタグデ（針細工の伝統的集落）の視察
と村との交流イベント

9月23日／インドネシア・日本交流セミナー

<セッション1>

・ジョグジャカルタの歴史的環境の保全

・ジョグジャカルタの王宮建造物の分布



ガジャマダ大学でのセミナー



バリの伝統的集落トゥンガナンを視察

- ・ジョグジャカルタの都市遺産の開発可能性

<セッション2>

- ・日本都市における歴史的環境（丸茂弘幸）
- ・歴史的街並みの保存（小浦久子）
- ・日本のHOPPE計画について（鳴海邦穎）

<総括討議、レセプション>

9月24日／ジョグジャカルタ郊外視察

- ・遺産コース（ボロブドゥール、プランバナン）、田舎コース
- バリ編（JUDI主催、ガジャマダ大学建築学科協力）

9月25日／バリのパフォーマンスのタベ

- ・村の楽団や舞踊団を招いてのバリの音楽とダンスの鑑賞

9月26日／アルディ博士と歩くバリの伝統集落

- ・ティヒンガン、トゥンカナン、ブブグブグ、ティンブラ

報告／山本茂（生活環境問題研究所）

<第9回セミナー>

10月24日（土）IHDセンター3F交流ホール
テーマ：「HAT神戸・東部新都心を見る
マスターplanの役割と課題」

パネラー：三輪秀興（神戸市都市計画局）
瀬渡比呂志（住宅・都市整備公團）

遠藤剛生（遠藤剛生建築設計事務所）

佐々木乘二（鳳コンサルタント）

コメンテーター：狩野忠正（神戸大学）

司会：小林郁雄（ヨー・プラン）

■第7回フォーラム関西'98は、11月20日（金）

花博記念公園鶴見緑地／国際陳列館ホールにおいて

、約140名の参加者を得て、「大地への取り組み」をテーマに開催された。あわせて、第1回フォトコンテストの主旨と経過報告を澤一寛写真展企画委員会からあり、写真家米谷昌子氏より審査講評及び授賞式が行われた。

●午前中は福田アジオ氏（神奈川大学教授・民俗学）から「大地が語りかけるもの—宿る大地とさえぎる大地」をテーマに基調講演が行われた。

●午後からは「大地の達人に聞く」をテーマに増田昇フォーラム委員長（大阪府立大学教授）を中心に5名のゲストスピーカーと5名のコメンテーターによる討論が行われた。

●大地の達人に聞く・アーバンデザインと起伏

ゲストスピーカー：成瀬恵宏（都市設計工房）

コメンテーター：中村伸之（ランドデザイン）・建築デザインと起伏

ゲストスピーカー：江川直樹（現代計画研究所）

コメンテーター：横山あおい（エイライン）

・起伏と土地の商品価値

ゲストスピーカー：河本一行（シェラプラン

コメンテーター：山崎謙二（KAN総合計画）・ランドスケープデザインと起伏

ゲストスピーカー：三宅洋介（SEN環境計画室）

コメンテーター：小浦久子（大阪大学）・土木デザインと起伏

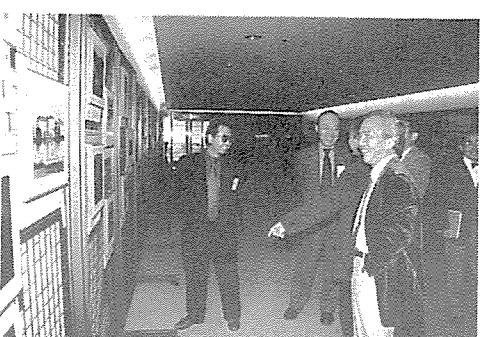
ゲストスピーカー：吉村憲（総合企画センター）

コメンテーター：松久喜樹（大阪芸術大学）

午後6時より50数名の会員やゲストの方々との懇親会が開かれ、酒と料理の中で来年のフォーラムのテーマや関西ブロックの課題などが賑やかに遅くまで繰り広げられ、8時に散会し、2次会へと鶴見緑地公園を後にした。



第7回フォーラム関西'98基調講演



第1回フォトコンテストの展示会場の風景

■四国ブロック

白石 高啓
SHIRAI SHI TAKAHIRO
四国ブロック幹事

ゆにて設計事務所

四国の風土再発見

*まずは愛媛からそして徳島へ

四国の風土再発見＊第一回街並みの魅力は10月31日JUDI会員他、宇和文化の里中町を守る会、大洲市肱南地区まちづくり推進班、地元建築士、行政の方など40名參加した。宇和町卯之町・中町通りの町並みを中心にウォッキングしながら、西日本最古級・近代洋風建築の開明学校（旧開智学校・松本市と姉妹館提携）での学習体験・光教寺の枯山水・先哲記念館での宇和文化のルーツを知り、4名の町並みガイドによる感動的な説明は参加者の共感をよんだ。特に蘭学者高野長英の隠れ家での説明は江戸から明治にかけて、この地が躍動感に溢れ日本中から注目された宇和の鼓動が伝わってくるようだった。その後、江戸時代から続く松屋旅館で交流会を開き、中町通り調査レポートも文化庁に提出され伝統的建造物群保存地区にやがて選定されることを前提に、全国で既に49地区（31道府県）選定された中で肱町南町（徳島）、丸亀市塩飽本島町笠島（香川）、室戸市吉良川町

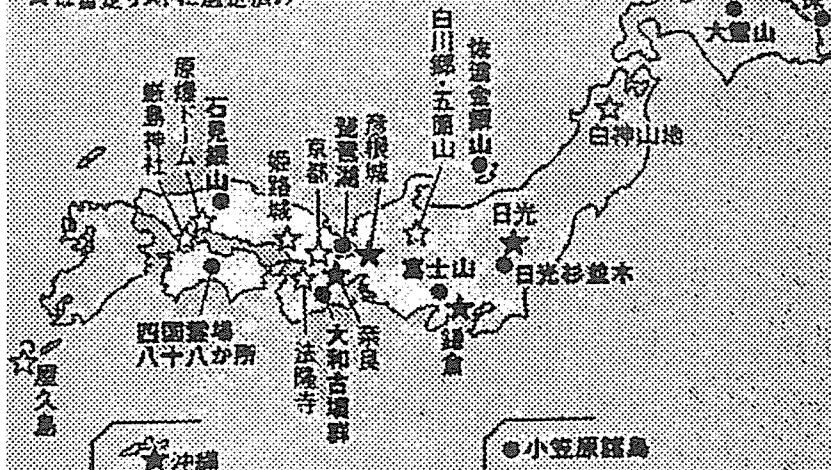
（高知）の事例発表でそれぞれの問題点も語られた。本物の中に偽物を造ることは環境デザインに混乱を招き歴史の連續性も色あせたものになろう。折角、町並み整備をしても過疎化、高齢化によって再生が危ぶまれるなど。しかし中町通りの町並みには手入れの行き届いた「品のいいまち」の生活が見えると感想も出て、このよう雰囲気を持続させることがキーポイントでそれが我慢の哲学。そのところを吟味しての街づくりは、大洲市肱南地区的「一過的な来訪者ではなく、大洲らしさに魅せられ足を運

んでくれるリピーター、言い換えるならばやすらぎ人の獲得に努めていくことが大切である」コンセプトが意義深い。この地区では人力車による街並みガイドを70名の市職員がボランティアで参加し生き生きとしているらしい。翌日その地区を見学した時、十分納得でき、おはなはん通りをはじめ数寄屋建築の粹が凝縮された臥龍山荘、近代洋風建築・市立おおず赤煉瓦館（元銀行）での民間人企画の柔らかい運営は現在開催中の「世界のレンガ展示」にも反映されている。これから楽しみになってきた環境デザインの変化を見守りたい。風土再発見の試みでアクセスした交流会だったが、歴史と文化の香り豊かなまちには魅力的な人々が悠然と大河の流れの如く存在しているとの認識にもなった。不易流行の中でこれからの方針は如何にして不易を追求するかが、環境デザインの基本となるだろう。現在、四国では1998年1月24日仙遊寺（四国靈場58番札所）で「四国遍路文化をユネスコの世界遺産リストへの登録を!!」宣言し全国的に知られてきた。第22回世界遺産委員会が11月30日より京都で開催されたが、全国的にも自薦ラッシュらしい。特に四国では道の文化一つ取り上げても環境デザインと深いかかわりが出てくるだろう。このような動きも考慮しながら又、1999年5月1日尾道～今治しまなみ海道開通によって脚光を浴びる瀬戸内の島々とJUDI中国・四国ブロックの交流など話題はつきないが、複雑系の世の中、世紀末を迎えてますます面白くなりそうだ。次回、四国の風土再発見は水遊都市in徳島から新年1999年1月30日（土）前後の予定です。

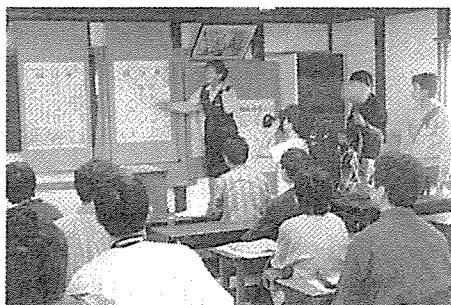
世界遺産リストへの登録を目指して動きを見せている主な地域

△は世界遺産に登録済み

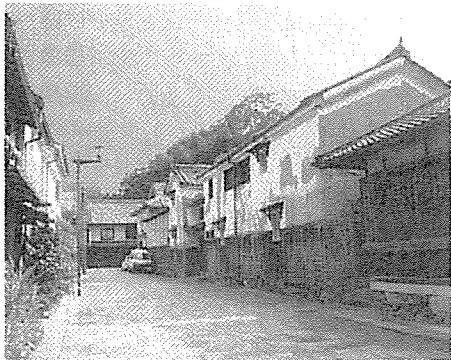
★は暫定リストに選定済み



▲世界遺産を考える読売新聞1998.11.26より



▲開明学校学習体験



▲おはなはん通り

事務局より

1. 新会員の紹介

1998年9月1日～10月31日の入会者は下記の通りです。（入会順、敬称略）

10月31日現在の会員数は、535名です。

氏名	勤務先
田邊 学	カラーブランニングセンター
松村 博文	北海道立寒地住宅都市研究所
莊司 洋文	㈱達環境計画

3. 住所変更等（敬称略）

氏名	変更内容（新）
赤瀬 達三	㈱黎デザイン総合計画研究所 〒102-0083 千代田区麹町3-5 一ノ瀬ビル Tel. 03-3263-6151 Fax 03-3263-7695
春谷 尚	環境・店舗・商品・グラフィックス： 〒125-0041 葛飾区東金町3-7-17 二葉ビル Tel. & Fax. 03-5660-0178
熊澤 雄一	(合)熊沢生活デザイン研究所 〒161-0033 新宿区下落合3-15-20-302 Tel. & Fax. 03-3953-6035
齋藤 彰良	㈱アール・アイ・エー神戸支社 〒657-0036 神戸市灘区桜口町3-1-1-301 Tel. 078-822-3901 Fax 078-822-6622
高橋 徹	㈱日本設計名古屋支社 〒460-0003 名古屋市中区錦1-17-13 Tel. 052-211-3651 Fax 052-201-8480
田村 誠	清水建設㈱設計本部 〒105-8007港区芝浦1-2-3シーパンクス館 Tel. 03-5441-0164 Fax 03-5441-0317
西 斗志夫	住宅・都市整備公団関西支社 都市開発企画部企画課 野村 庭園研究室 〒501-0103 岐阜市一日市場1-120-203 Tel. 058-295-4471
宮前 洋一	㈱スペースビジョン研究所 〒540-0012 大阪市中央区谷町2-8-1 Tel. 06-942-6569 Fax. 06-942-6897
宮野 裕子	アジア航測㈱関西コンサルタント部 都市計画課 〒564-0063 吹田市江坂町2-1-11 江坂山甚ビル2F Tel. 06-369-0556 Fax. 06-369-0538
吉田 八郎	太平洋セメント㈱セメント営業本部 営業技術部 〒101-8357 千代田区西神田3-8-1 Tel. 03-5214-1631 Fax 03-5214-1738

編集後記

今回の特集記事の編集にあたり、改めて「京都」について考えさせられました。まず第一に、小京都と“呼ばれたり”、“呼ばれたい”市町まで含めると予想外に多いのに驚きました。そして、京都自身の1200年もの歴史伝統の重みと、それらが今なお生きづき、しかも京都を本拠地とし、グローバルに活躍するハイテク企業が多く存在することに今さらながら驚きました。

「小京都」が京都を模倣するように、京都もまた他から多くのものを模倣し、吸収し発展させてきた歴史があります。そこから京都の独自性が生まれ、現在も脈々と受け継がれてきています。これから京都も模倣されることを惜します、それ以上にそれを模倣し、吸収し新しい独自性を築いていくことが大切なことではないかと思いました。

「小京都」と呼ばれるまちへのアンケートでは、多数の方々の御協力をいただきました。ここに御礼申し上げます。

(河本一行)

広報・出版委員会

土田 旭	松村みち子
澤木 俊岡	伊藤 光造
近田 玲子	清水 泰博
菅 孝能	河本 一行
中嶋 猛夫	森川 稔
櫻井 淳	横山あおい
作山 康	吉田 慎悟